



第 60 号  
 月 | 回 発 行  
 ひの心を継ぐ会  
 〒799-1336  
 住所:愛媛県西条市  
 上市甲 720-1  
 TEL:080-2986-0856

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

古事記

天地の初発のとき

— 実在 — (六)

反省的方法

2 認識批判、カントの先験論

竹葉 秀雄

これらの哲学の歴史を受けたカント(1724~1804)は如何なる哲学を  
 展されたか。彼が哲学の貯水池と言われるのは過去の哲学をすべて受け入れ、  
 これからまた新しい流れを作ったことによる。当時のヨーロッパに於ては、デカ  
 ルト派とライプニッツ派との盛んなる論争があった。本来常識的なるカント  
 は、健全なる頭の持ち主が真面目に主張することであるならば、むげに否定  
 すべきことではない、何らかの真理性があると考え、若し両者とも健全なる頭  
 の持ち主と思われる人々がいずれも真面目に主張する内容が互に相容れない  
 場合どうすればよいのか。その場合でもやはりそれぞれ主張する真理性を  
 含んでいるにちがいない。ただ有限な個々の精神の主張するところが、いっぺんに  
 あらゆるものに対して妥当するということはおそらく期待すべきではなく、  
 先ず或一定の限られた範囲内に於てのみ正当な妥当性を主張し得るという  
 制限を免れないであろう。故に斯に相容れない二内容をもった二つの主張が  
 あった場合、若しその主張内容がそれぞれ異なる範囲にあてはまることが明  
 らかにされたならば、両者は互に少しも害い合うことなくそれぞれの領域に

於てその完全なる妥当性を確保することが出来るはずである。これがカントの最  
 初からの確信であつて、彼の二十二歳の時の処女作「活力測定法」にすでに見出  
 すのである。若きカントが盛んな意気をもってデカルト派とライプニッツ派との論  
 争に解決を試みたのであつた。

このように一見相容れないように思われる二つの異なる主張にそれぞれそのと  
 ころを得しめることによって、限られた範囲内での妥協性を確保せしめることこ  
 そ、後に所謂「二律背反の批判的解決」と称せられるものの真髓であつて、カント  
 はつねに問題を二律背反の形において捉え、それを批判的に解決することによつ  
 て彼の哲学思想を發展させてきたのであつた。

## 農士道

## 第六章 日本農道の本義

## 第一節 日本精神の真髄

## 菅原 兵治

前章に於て士道を農的生活の裏に行ぜんとする農士の道を考究したが、それを更に具体化して、「日本」の自覚の下に実践せんとする念願より、本章に於て日本農道の真髄を明らかにしたいと思う。其の為には些か迂説と思われるかも知れぬが、先ず日本精神の根本義に対する私の信ずる所を述べ、之に立脚して日本農道に言及することとする。

## 一、日本精神とは何か

## 日本精神的研究

近来日本精神に関して種々の議論が発表せられるが、其の中には研究の態度に於て、其の内容に於て、果して純乎たる日本精神的所産なりや否やを疑わしむるものすらなしとせぬ。或者は日本精神の定義を下して、「日本精神とは日本の国体を明徴ならしめ、益々之を發達せしむる精神なり」と。勿論此の定義に何等の不可はない。然し、かくてはこれを亞米利加精神なり、露西亞精神なりに代入して「亞米利加精神（若しくは露西亞精神）とは、亞米利加の国体を明徴ならしめ、益々之を發達せしむる精神なり」といつた所で何等差支えが無いようなもので、かかる形式論的定義を幾等操った所で、それは畢竟日本精神の標本か化石かの研究であつて、未だ生きた日本精神の研究ではあるまい。又、日本精神の特徴は曰く祖先崇拜、曰く清淨潔白……と、これも勿論可である。然し、若し其の一項目一項目の徳目を分析的に拾い上げて比較したならば、これらの徳目中には他民族にも之を有するものが数々あるであろう。例えば清淨潔白という徳目を以て見るも、食膳に着く前には必ず手を洗うという一事のみを取って比較したならば、西洋人の方が我国人よりも清潔を好むということにさえなるであろう。之を他に比喩を取つていうならば、若し人間の顔を分析的に観て眼が横に二つ、鼻が縦に一つという風に研究したならば、恐らくは誰の顔も同じものを有しているという事になる

であろう。更に人間全体の成分を分析して、酸素が幾等、水素が幾等、燐酸が幾等と計量したならば、聖人君子の身体も、大悪罪人の身体も、大した違いはないことになるであろう。甲という人間乙という人間の相違特徴は、かく機械的に分析せざる、全体としての生きた、あるがままの相（すがた）に存する。日本精神の眞生命も亦然りである。殊に日本精神に於ては後に述べる如く、全体性、総合性を特徴とする。その日本精神を徒に分析的のみに取扱つて、定義づけたり、項目を羅列したりすることは、むしろ日本精神の非日本の研究——更に一般的にいえば、非東洋学的研究とも言い得べき、非日本精神的方法なのである。

## 日本精神

然らば、純乎たる生ける日本精神の本質は何か。私は次の如く簡明にいたいと思う。

日本精神とは、「ひ」の本精神であり、大和心である。以下之に就いて其の要点を説明することとする。

## 中庸について

三浦 夏南

現在、四書の『中庸』を若林強齋先生の師説によって読み進めているのだが、人間とは、そもそも「中」の道を進むことを運命付けられた存在であるということが、如実に理解されてくる。例えば人間が食べて生きるということを考えてみても、その全てを天地自然にまかせて狩猟や採取の世界に安住していたのでは、人倫が立たず、文化が生まれず、人間の精華を発揚することが出来ない。逆に人為にまかせて科学を研究し、技術の精を極めて、近代文明を極限まで推し進めても、却って人倫は退廃し、文化は廃れ、人のためならぬ機械のための社会に墮してしまふ。我々人間は、祖神の伝え給ひし稲穂を戴いて、農を本として勤勞し、親族一致団結して、良俗文化を創造する「中庸」の生き方に止まってこそ、はじめて人間らしく生きることが出来る。天為と人為どちらかに偏ると文化は崩壊し、双方が相即する農本的共同生活の中でのみ文化は生成し進展する。

その農業の中で考えると、自然の力にまかせて稲種を大地にばら撒いてみても、雑草に覆われて稲は順調に生育することが出来ないが、草は敵だとはばかりに除草剤をまき散らしたところで、草は生えてこなくなるかもしれないが、肥沃な大地は荒廃し、草も稲も育たなくなってしまう。自然まかせも農業でないが、人為の徹底もまた農業にはならない。田に水を張って草が蔓延することを防ぎ、それでも生えて来た水草を、家族団結して取り除いていく。稲を育てる大地の力と、草から防ぎ守る人間の仕事が一つになってはじめて稲作が成立する。自然と人為の相即するところにしか農業が生まれないことがここでも分かる。

天地自然と人間が密接に関わって生活が行われている農林水産の現場では、「中」ということが当然であり、この当然を外れば生活を営むことが困難になる。しかし現代社会のような人間の基本的な生き方から大きく乖離した社会生活の中に身を置いていると、こんな当たり前で簡単なことが分からなくなってしまう。食べるものを作るといふ大本の農業が国民の一割を切っているのに、それを補足的に流通し、融通するはずの第三次産業が六割を超えている。作る人が圧倒的に少な

く、それを売ったり消費したりする人が溢れかえっている。常識的に考えれば、現在の我が国の在り方が壊れていることは明白である。しかし、あまりにも「中」を離れたこの社会に住んでいると、この異常性すらも分からなくなり、人間の当然や適性が皆目見当もつかなくなる。そこからは極端に走った異端の説ばかりが生まれ、あまりにも常識的で自然な正説はかえって受け入れられなくなる。

個人的肉体的な欲望がさらに充足されて行けば、人間が幸福になるとの思想は言うまでもなく誤りであるし、この精神さえどこか彼方にある天国や浄土に召されて安泰であれば、万事良しとの思想も妄想に過ぎない。神の如き靈的な精神性をこの現実には我が身を通して表現することが正解であることは言うまでもなく、心身一如の惟神の生活は我々の祖先が遙か昔から連綿と続けて来た農本的共同生活の中に、人類の当然の生き方として継承されてきたのである。そのことを知り、事に敏にして言に訥に、四の五の言わずに実践すること、これのみが古人の伝えた「中庸」に至る具体的工夫である。

## とよくも農園だより

三浦 美恵

寒波の時期にはあまり卵を生まなかった鶏達がたくさん卵を生み、あちこちで梅の花が咲き、畑の草も伸びてきました。この生活をしていると、至るところで春の訪れを感じます。

今月から、お米の準備が始まりました。今年は除草剤を一度も使用せず、使用する肥料にもこだわったお米の栽培に取り組みます。肥料をふって耕し、田植えに向けて準備をしました。種まき前に、温湯消毒と言って六〇度のお湯にお米の種子をつけることで殺菌消毒する作業も完了しました。「ツキアカリ」という早生品種を中心に育てていく予定ですが、その他に「朝日」などの古代品種や、もち米、赤・緑米、「ハッピーヒル」という福岡正信さん考案の非常用米も栽培していきます。

地元のベテラン米農家さんと協力し、販路も新たに作  
つていこうと計画しています。

暖かくなり根が動き出す前に、果樹の苗一九本も  
定植しました。キウイ、柿、梅、ゆず、レモン、いちじく、  
みかん、ブルーベリー、スモモ、お茶を、土を入れた肥  
料袋に入れて水やりをし、育てていきます。今年も肥  
料袋で苗を育て、来年までに果樹畑の土づくりを行  
い、次冬からは果樹に最適な畑に植えてあげたいと思  
います。数年はまだ実が付きませんが、子供達がそれ  
ぞれもう少しずつ大きくなった時に、一緒に収穫を楽  
しみたいと思います。果樹が充実してくると、自給率  
がまた一つ高まりそうです。

三月中旬には、鳥取県智頭町に馬耕研修を受けに  
行ってきました。昨年夏に一度訪問した場所で、全国  
でも数少ない馬耕をしている所です。二頭の「ドサン  
コ」を扱う岩田さんに、馬の扱い方や緊急時の対処の  
方法、的確な指示の仕方、重いものを引くための方  
法を教わりました。研修を受けた後の主人の表情に  
は、トラクターで耕耘した後の疲労感とは違  
う充実感がありました。現在牧草の検討や電  
気柵の選定、馬小屋建設準備など、馬を飼う  
ための準備も着々と進んでいます。

主人に続いて私も日常着を着物に改めまし  
た。育児や家事、農作業など、着物を着づらい  
条件はいくつもあります。素材を洗えるもの  
にしたり、たすきをかけたり丈を短くして家  
事をしやすくしたり、紐を結んで帯の代わり  
にしたりと、アレンジを加えることで日常生活でも着ることが出来ています。ま  
ずは着物に慣れることから始めていこうと思います。



また今月特筆すべきこととして、塩ハウスでの塩づくりを開始しました。ビニ  
ルハウスを庭に立て、ガラスと木で作った枠をハウス  
内に置き、その中に海水を流し込み、毎日かき混ぜ  
ています。徐々に塩の結晶が出来てきており、もうす  
ぐ初めての塩が取り出せそうです。

その他には、春野菜の定植や、夏野菜の種まきも  
しました。しばらくは、ビニルハウス内で育てていく  
予定ですが、初めての固定種トマト・ナス・ズッキー  
ニ・唐辛子を元気に育て、種とりまで丁寧に栽培し  
たいと思います。

暖かくなり、本格的な農作業が始まります。今年  
も農業に学問に、家族で協力して励みたいと思いま  
す。



★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展さ  
せることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の  
心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を  
行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお  
願い申し上げます。

★年会費

- 一般会員 三千元
- 賛助会員 一万円
- 特別賛助会員 三万円
- 支援会員 一万円

★振込口座

- 愛媛銀行 普通預金 本町支店
- 口座番号 六一四二七三五
- 『ひの心を継ぐ会』